

原 著

## 大学生における精神障害のとらえ方 II —参加型学習実践による変化—

Understanding mental disorders in university students II :  
Changes based on active learning practice

木浪富美子<sup>1)</sup>  
小川 徳子<sup>2)</sup>

**要約：**本研究の目的は、精神障害についての知識の獲得と、精神障害者との直接的な交流を含む、参加型学習実践が、精神障害のとらえ方に肯定的な変化をもたらすのかを検討することであった。大学生を対象とし、学習活動前後における質問紙調査の結果を比較した。使用した質問紙は、元々は、精神障害者との協働で考案されたものであり、精神障害者との社会的・心理的距離感、精神疾患と精神障害者へのイメージ、精神障害者にとっての生活のしづらさについての見解を問う内容となっていた。

その結果を分析すると、精神障害者との社会的・心理的距離感が、活動後には肯定的に変化していた。参加型学習実践は、参加者が、地域社会で共に暮らす人物としても、生活を共にする人物としても、より信頼できる人物として受けとめられるようになる効果を持つと考えられる。

精神疾患へのイメージはより正確なものとなっていた。精神障害者へのイメージは、学習活動以前にどのようなイメージを持っていたかを問わず、ニュートラルな見解を持つようになることが示された。直接的な交流が、一般的な他者ととらえるのと同様の態度に近づけたと言える。

精神障害者にとっての生活のしづらさに対する見解は、特に、社会活動における困難さへの気づきが促進される可能性が示された。しかし、人間関係における困難さについては、気づきが生じた学生と生じなかった学生とが見られた。交流によって知り得たことを、共有するための取り組みが必要だったのかもしれない。

本研究によって明らかになった直接的な交流を含む学習活動の効果は、精神保健福祉士育成のための教育プログラムを構築する際、重要な手がかりとなり得るだろう。

**Key Words：**精神障害 直接的な交流体験 精神障害者へのイメージ こころのバリアフリー  
参加型学習実践

### はじめに

木浪・小川(2007)では、講義を通じた正確な情報の伝達により、地域社会の一員として共に暮らす人物・生活を共にする人物としての精神障害者への見解に、変化が生じるのかを検討した。その結果、精神障害者への「社会的・心理的距離感」は、全体として肯定的な方向へ変化することが示された。精神障害者も共に暮らす社

会の一員だという、認識を持つことにはつながっていたようだ。しかし、「精神疾患・精神障害者へのイメージ」には、大きな変化は認められず、ネガティブなイメージが無くなることも、ニュートラルなイメージが増加することもなかった。つまり精神障害者に対する偏りのない視点を獲得するまでには至らなかったと考えられる。よって知識の習得だけでは、精神障害者を身近な人物として受け入れるような、バリアフリーの感覚の育成には限界があるとの結論を得たといえる。

このバリアフリーの感覚は、先入観のないニュートラルな感覚である。援助を受ける側の人々が、自身を否定されない、安心して関われる人物であると援助者をとら

2008年12月3日受付／2009年1月21日受理

1) Fumiko KINAMI

関西福祉大学 社会福祉学部

2) Tokuko OGAWA

関西福祉大学 社会福祉学部

えるためには、援助する立場にある者が、この感覚を持って接することが重要である。援助する側とされる側が、互いに信頼しあえる人間関係が、効果的な援助の土台となりうるのだ。

例えば、信頼できる友人のような、親しい人物としてつきあうには、まず、隣人としての出会いのような、さりげないふれあいの場が用意されるべきなのではないだろうか。そこで今回は、必ずしも援助を目的としない、直接的な交流体験がもたらす効果を分析することにした。最初の試みとして、学生のゼミ活動の中に、当事者との交流を含む参加型学習実践を導入し、それによる変化を検討した。内容は、座学（講義科目「精神保健福祉論」の履修）と並行して、精神障害をもった人との直接的な交流体験を持つ、理論と実践を共に備えた活動とした。

通常、互いに初対面の人物として出会い、交流していくためには、相手を否定せず、その立場や気持ちに配慮する態度が求められる。そのような態度で接することが、相手を真に理解することにつながっていく。精神障害者との交流では、生身の人物としてふれあうことによって、精神障害者が直面する、一社会人としての生活のしづらさが何であるかを窺い知ることが、その理解に含まれることになる。結果として、情報伝達のみの場合よりも、生活者として受けとめる変化が生じるのではないだろうか。

さらに、交流と並行して、理論的な知識を学んでいることによって、精神障害者のおかれている一般的な状況が把握できる。それは、交流の場において、相手の実情を冷静に判断し、適切に関わることにつながる。適切な関わりは、正確な理解をもたらすはずである。従って、参加型学習実践後には、参加した学生の意識の中から、精神障害者に対する先入観を払拭するような変化が生じていることが期待できる。

本研究においては、理論と実践を兼ね備えた学習活動の効果を分析する。それによって、大学で習得する知識と当事者との交流経験が、精神障害者を生活者として受けとめ、同じ人間として柔軟な見方ができるようになるのかを明らかにする。交流の効果が明らかになれば、偏りのない視点を身につけ、相談・援助活動に従事する人材を育成するには、事前にどのような学習のチャンスを提供しておくべきであるのかを考える手がかりになるはずだ。

## 目的

木浪・小川（2007）と同じ質問紙を用い、理論と実践を兼ね備えた学習活動を含む授業に参加した学生の、授業参加以前と授業終了時での変化をとらえる。その結果を分析することによって、直接交流を含む参加型学習実践が、精神疾患と精神障害者のとらえ方にもたらす効果を明らかにする。

今回、参加型学習実践の導入を試みた授業は、精神保健福祉士を養成するプログラムの一環ではなかった。そのため、学生達の活動の内容は、事前に組織的に構成されたプログラムではなく、学生の希望に沿う形で継続的に展開されたものである。

しかしその経験が、精神疾患と精神障害者への真の意味での理解につながることを示されれば、精神障害者の相談・支援を業務とし、彼らの社会的な自立に成果をあげられる専門家を育成するために何が必要かを考える一助となりうる。

また、今回は、精神障害者が抱える生活上の困難さへの理解を問う項目（質問紙の問30）も分析の対象とした。適切な支援には、問題状況の正確な把握が欠かせない。正確な把握に、今回の学習活動がどれほどの効果をもたらすかを検討し、精神保健福祉士を目指す人々の事前研修として、どのような経験が必要かを考える。そして、専門家の育成プログラムの開発につなげることを目指す。

## 方法

学習活動の期間 2007年4月から2008年1月まで。

参加者 関西福祉大学には、「演習・コミュニティアワーⅡ」という、「地域をコンテクストとして学ぶ」を基本的なコンセプトとする授業形態がある。その授業のクラス編成の際、『精神障害者への支援について：病院や生活支援センターなどのフィールドワークや資料により、精神障害者の生活実態へのアプローチを試みる。また、その現状に対して、われわれのできることを模索したい。』というテーマを掲げて、参加者を募集した。その実践的学習活動に参加することを希望して集まった大学生（2年次生）18名が参加者となった。この18名のうち、7名は、今回の学習活動に参加する以前に、精神障害者との接触経験があり、11名はなかった。また、精神疾患についての理解は、次に述べる通りだった。『激しく変化する現代社会ではだれでも精神疾患になる可能性がある』に対し、「とてもそう思う」と回答したのは8

名(44.44%)、「そう思う」：6名(33.33%)、「そう思わない」：4名(22.22%)だった。『精神疾患について、どのようなイメージを持っていますか』という問いに対しては、「具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気」と回答したのが14名(77.78%)、「治療の難しい進行性の病気」が2名(11.11%)だった。

「病名からイメージがわからない」と回答したのは2名(11.11%)だった。全体として、今回の対象者は、精神障害者について、何の経験も知識も持たない人物ではなかった。また、精神障害者に対し、何らかのイメージを持っていたのは18名中13名だった。そのイメージを持ったきっかけは、「実際に接してみて」(5名)か、「本やテレビで情報を得て」(8名)だった。

活動の概要 授業期間である4月から翌年2月までの約1年間の間に、精神障害をもった人との直接的な交流体験に焦点をあてて、(1)「さんぼみち」訪問と「七夕祭り」の企画、(2)シンポジウム「みんなが街で元気に生きるには」の聴講、(3)当事者アンケートなどの活動に取り組んだ。それぞれの内容を以下に述べる。

(1)「さんぼみち」での活動：学生たち同士も初めてのクラスであり、意見を述べ安いであろうバズセッションの形を取って、まずはゼミ活動への希望・期待を明らかにしてもらった。「精神障害者への支援」というテーマに惹かれて参集した学生たちだが、過半数は、未だ精神障害者と呼ばれる人たちと直接にかかわった経験を持たず、まずは彼らとの出会いの場を設定した。

幸い赤穂市には医療法人千水会赤穂仁泉病院に併設された精神障害者地域活動支援センター「さんぼみち」があり、本学の卒業生も職員として活躍している。精神保健福祉士でもある社会復帰部門部長は、学生の若い力に期待を寄せ、交流の申し出を快く受け入れてもらえた。

5月に、「さんぼみち」でのレクリエーションのプログラムでもあるゲーム大会に合流させてもらいながら、施設長から、ボランティアとして参加する際の施設や利用者に関する講話を受けた。7月の2日間は学生による企画が許されたので、時期にも適う「七夕祭り」での交流を計画した。学内での授業時間も活用してプログラムの内容を検討し、役割を分担して準備に取りかかった。7月5日には利用者の協力を得て、笹に結ぶ折り紙の飾りを作り、短冊に願い事を書いた後で、七夕にちなんだ歌を歌い、西瓜割りをして楽しんだ。そして12日には笹飾りに囲まれて、学生の用意した5つのゲームに興じた。学生は全員が一役を担い、利用者の輝く笑顔に触れ

て、心満たされる一時になった。

(2)シンポジウムの聴講：2007年から、当事者が地域で生活する「元気」を取り戻し、さらにアップさせることを目指す、西播磨精神障害者「元気」アップ事業が、3年間を目処に開始された。この事業は、西播磨圏において、精神障害者を取り巻く環境を変え、生活しやすくすることにより、精神障害者が安心して暮らし、持てる力を発揮して「元気」に活動できるようになるため、精神障害者と共に暮らす地域づくりを支援するものである。その一環として開催される「こころの健康セミナー」に参加する運びになった。

10月7日(日曜日)に、本学の先輩の車による送迎の支援を受けて、たつの市総合文化会館での西播磨精神障害者「元気」アップ事業・こころの健康セミナーに出向いた。「浦河べてるの家」の当事者2名と精神保健福祉士によるシンポジウムが主な内容であった。「浦河べてるの家」のみなさんは、自らの病気についても、ありのままに話し、生活の苦労をも等身大で語る。当事者やその保護者の方たちもフロアーに大勢おり、「さんぼみち」のみなさんとは挨拶を交わし、隣り合った席での聴講となった。

(3)アンケート：当事者と触れ合うことで精神障害者に対しての認識を新たにすることができたゼミ生は、自分たちの体験からの学びについて、他の学生にも知ってもらいたいと考えるようになった。そこで、主観的な意見に終わらないために、一般市民の精神障害者への関わり方の体験と認識をアンケート調査する一方で、当事者自身の自らに対する認識と他の人へのメッセージについての調査も試みた。特に当事者に対しては、赤穂仁泉病院のデイケアセンターと「さんぼみち」に何度か足を運び、面接方式をとり、失礼のないように配慮した。

手続き 上記の活動に参加した学生を対象に、活動前と後に、木浪・小川(2007)で紹介した質問紙調査を実施した。活動前の調査は、前年2006年11月～2007年1月までの「社会福祉基礎演習」に授業の一環として実施した。活動後の調査は、2008年1月の「演習・コミュニティワーII」の最終回において実施した。調査項目は問34までで構成され、ほとんどの問に、いくつかの選択肢が設定されており、その中から該当する項目を選ぶ形式で回答を求めた。責任ある回答を促すため、記名回答とした。

結果

I. 「精神障害者との社会的・心理的距離」の結果

地域社会の一員として共に暮らす人物という観点からの質問項目（問10～15・17～21・23・24）と、生活を共にする人物という観点からの質問項目（問16・22）について、回答欄に設定されていた4つの選択肢を、肯定的な度合いによって4点～1点まで配点し、平均値を算出した。つまり、平均値が高いほど、肯定的な見解が存在していることを表すようにした。実践的学習活動に参加する前と後での結果は、図1に示す通りであった。

活動参加前・後とも、最も肯定的な見解が認められたのは、「精神障害者はできるだけ隔離収容すべきであると思う」かを問う項目（問14）だった。逆に、肯定的な度合いが最も低かったのは、「精神障害者が、一人あるいは仲間どうしでアパートを借るのは心配だと思う」かを問う項目（問23）だった。

15項目の平均値に対し、2要因（活動参加前後×項目）の分散分析（被験者内計画）を行なった結果、交互作用が有意であった（ $F(14,238) = 2.80, p < .01$ ）。活動の単純主効果を検定したところ、問10「精神障害者の行動はまったく理解できない」・14「精神障害者はできるだけ人里離れたところに精神疾患院を建てて隔離収容すべきである」・23「精神障害者が、一人あるいは仲間どうしでアパートを借りて生活するのは心配だ」において5%水準で有意であり（問10： $F(1,17) = 7.37$ , 問14： $F(1,17) = 4.86$ , 問23： $F(1,17) = 7.59$ , すべて  $p < .05$ ）、問11「精神障害者はかわいそうである」・12「精神障害者が普通でない行動をとるのは病状の悪いときだけで、ふだんは社会人としての行動がとれる」・17「精神疾患院に入院した人でも、信頼できる友人になれる」・18「精神障害者は、病気の再発を防ぐために自分で健康管理をすることは期待できない」・19「精

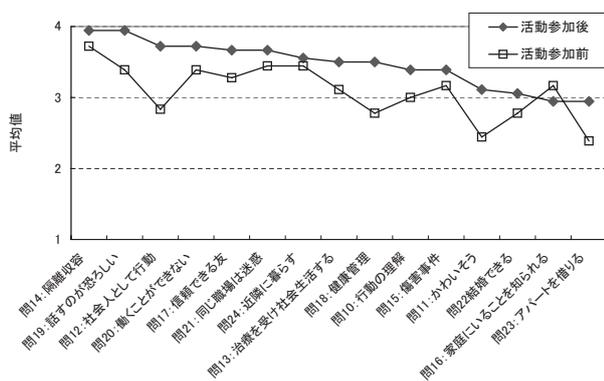


図1 社会的・心理的距離：活動前後の平均値

神障害者の人と話すことを恐ろしいと感じますか」では1%水準で有意であった（問11： $F(1,17) = 11.33$ , 問12： $F(1,17) = 31.09$ , 問17： $F(1,17) = 10.82$ , 問18： $F(1,17) = 13.75$ , 問19： $F(1,17) = 14.66$ , すべて  $p < .01$ ）。どの項目においても、活動後の方がより肯定的な値となっていた。さらに、「適切な治療を受けていれば、入院せずに社会生活できる人が多い」と思うか（問13： $F(1,17) = 3.24, .05 < p < .10$ ）、「精神障害者は働くことができない」と思うか（問20： $F(1,17) = 4.25, .05 < p < .10$ ）、「精神障害者と結婚できる」と思うか（問22： $F(1,17) = 4.21, .05 < p < .10$ ）についての質問項目では、活動後の平均値の方が有意に高い傾向が認められ、活動後にはより肯定的になる可能性が示された。項目の単純主効果は、活動前においても（ $F(14,238) = 7.49, p < .01$ ）、活動後においても有意であった（ $F(14,238) = 6.53, p < .01$ ）。LSD法を用いた多重比較の結果、活動前は、問11・22・23の平均値が他の質問項目よりも有意に小さく、問14・24の平均値が他の質問項目よりも有意に大きかった（ $Mse = 0.3527, p < .05$ ）。活動後は、問16・23の平均値が他の質問項目よりも有意に小さく、問14・19の平均値が他の質問項目よりも有意に大きかった（ $Mse = 0.3010, p < .05$ ）。

活動の前後を比較したとき、有意差が認められなかったのは、地域社会の一員として共に暮らす人物という観点からの質問項目では、「精神疾患院が必要なのは精神障害者が傷害事件をおこすからだ」と思うか（問15）、「精神障害者と同じ職場になったら迷惑か」（問21）、「近隣に精神障害者が暮らすことは迷惑だと感じるか」（問24）だった。そして、生活を共にする人物という観点からの質問項目では「家族に精神障害者がいるとしたら、それを人に知られることを気にしないか」（問16）だった。

つまり、地域社会の一員としての見解では、13の質問項目中10項目において、活動後の方が、肯定的な方向へ変化するか変化する傾向が認められ、3項目（問15・21・24）には変化が認められなかった。また、生活を共にする存在としての見解では、「精神障害者と結婚できるか」は、肯定的に変化する傾向が認められたものの、「家族に精神障害者がいるとしたら、それを人に知られることを気にしない」については、変化がないことが示された。

地域社会の一員として共に暮らす人物という観点からの質問項目の1つで、精神障害者が隣人になったと想定

して4つの選択肢による回答を求めた問25の結果を、表1に示した。「3. あまりかわからないようにする」・「4. 隣組になることを受け入れず、他の場所に住むように働きかける」という選択肢は、まったく選ばれなかった。活動前・後ともに、ほぼ全員が「1. 困っているときはできるだけ手を貸すようにつとめる」・「2. 他の人とおなじような近所付き合いをする」のいずれかを選択していた。活動前：選択肢1→後：選択肢2と変化した参加者は5名いたが、選択肢2から選択肢1へと変化した参加者はいなかった。活動後において、その他に区分された1名の参加者は、活動前には選択肢2と回答していたが、後には『困っているときは手を貸すが、他の人と同じように接する。』と、2つの選択肢の要素を同時に含む回答をしていた。

## II. 「精神疾患・精神障害者へのイメージ」の結果

### 問26：精神疾患へのイメージ

問26では、病気としての精神疾患へのイメージについて、「1. 病気のひとつで治療もだんだん分かってきている病気」・「2. 治療の難しい進行性の病気」・「3：具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気」・「4：病名からイメージがわからない」という選択肢による回答を求めた。選択肢ごとに人数をまとめた結果を、表2に示した。活動前・後ともに、選択肢3（具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気）での回

表1 問25の結果：隣人になったときの付き合い方（人数）

	困っている時 手を貸す	他の人と 同じ付き合い	その他
活動参加前	11	7	0
活動参加後	6	11	1

表2 問26の結果：精神疾患という病気のイメージ（人数）

	治療も分かって きている	進行性	不安定	イメージが わからない
活動参加前	0	2	14	2
活動参加後	2	0	16	0

表3 問27の結果：精神障害者へのイメージを持っているか（人数）

	変化なし		変化あり	
	持つ	持たない	持つ	持たない
活動参加前 →活動参加後	→持つ	→持たない	→持たない	→持つ
該当人数	11	1	2	4

答が多かった。選択肢3と回答した人数と、それ以外の選択肢で回答した人数とに分けて、2項検定を行なった結果、どちらの時期でも、選択肢3を選んだ人数の方が多かった（活動前：5%水準、活動後：1%水準）。活動前に「2. 治療の難しい進行性の病気」を選択した2名と、「4：病名からイメージがわからない」を選択した2名は、活動後には全員が「3：具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気」へと変化していた。活動後に「1. 病気のひとつで治療もだんだん分かってきている病気」を選択した2名は、活動前にはどちらも「3：具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気」を選択していた。

### 問27・28：精神障害者へのイメージ

問27では、漠然と「精神障害者に何らかのイメージを持っていますか」と尋ねた。活動参加前にイメージを持つと回答したのは13名、活動後は15名だった。前後で回答が変化した人物もいた。その詳細は、表3に示す通りであった。活動前後での変化の有無のみに着目すると、変化なし：12名、変化あり：6名であり、2項検定の結果、有意差はなかった。

問28では、具体的な項目を挙げ、イメージの内容について尋ねた。選択肢に設定されていた10項目を、ポジティブ（まじめ・気を遣う・明るい・正直・お人よし・やさしい）・ネガティブ（変わっている・暗い・怖い）・ニュートラル（普通の人と同じ）の3種類に分け、結果を整理した。すると、3種類のいずれかに該当するイメージのみを持つ人物、相反するはずのポジティブとネガティブ両方のイメージを持つ人物、ニュートラルなイメージを併せ持つ人物、3種類すべてのイメージを持つ人物とが見られた。この分析結果を、図2に示した。活動参加前後における人数比率に、最も大きな変化

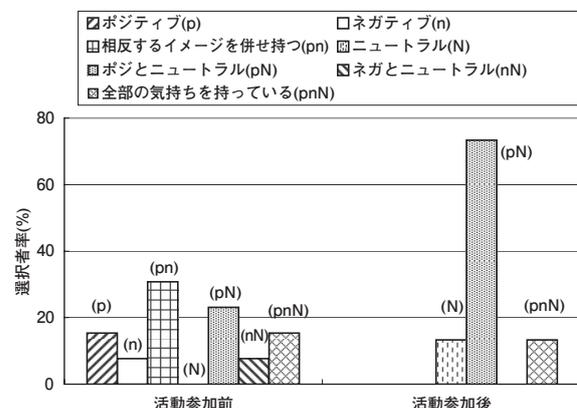


図2 問28の結果：精神障害者へのイメージ

が見られたのは、ポジティブとニュートラルなイメージの両方を持つことを示す項目だった。また、活動後には、ポジティブなイメージのみ、ネガティブなイメージのみといった一定の方向性のイメージのみを持つ人はいなくなり、全参加者が、ニュートラルを含むイメージを持つようになっていた。

活動前後での変化について、詳しく検討してみると、全18名の参加者のうち、ニュートラルなイメージが維持されたのは18名中9名、活動後、ニュートラルなイメージが加わったのは6名であった。残り3名のうち、1名は活動前後共に「イメージは持っていない」と回答し、2名は活動後に「イメージは持っていない」へと変化していた。ポジティブなイメージについては、活動後に加わった人物が3名いたが、消失した人物はいなかった。ネガティブなイメージについては、活動後に消失した人物が5名いたが、加わった人物はなかった。

### Ⅲ. 精神障害者が抱える「生活のしづらさ」への見解

問30では、精神障害者が、精神疾患があるために困っていると思うことは何だと思うか、15個の選択肢（「1. 話し相手がいない」・「2. 友達がいない」・「3. 安らげる場所がない」・「4. 仕事に就けない」・「5. 収入がない」・「6. 信頼されない」・「7. 一人前に扱われない」・「8. 奇異な目で見られる」・「9. 病気の話ができない」・「10. 理解されない」・「11. 日中過ごす場所がない」・「12. 目標がない」・「13. 役割がない」・「14. 家事ができない」・

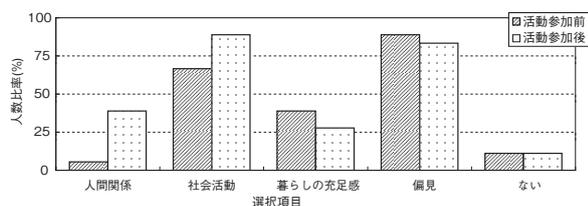


図3 問30の結果：精神障害者が精神疾患のために困っていると思うこと

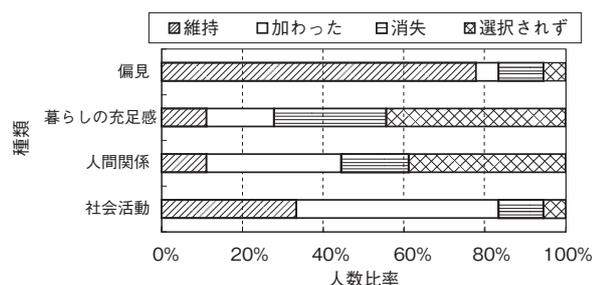


図4 問30の分析結果：生活のしづらさに対する気づき

「15. 結婚できない」) から選んで回答してもらった(複数選択可)。それらの選択肢を、「社会活動」(選択肢4・5)、「人間関係」(選択肢1・2・15)、「暮らしの充足感」(選択肢3・11・12・13)、「偏見」(選択肢6・7・8・9・10・14)という4項目に分け、結果を分析した。活動前・後ともに、精神障害者が困っていることは「ない」という回答が、2名から得られた。各項目を選択した人数から選択比率を算出し、図3に示した。活動前後で、最も大きく変化したのは人間関係であった。

今回の活動によって、どのような変化が生じたのかを詳しく分析するため、「社会活動」・「人間関係」・「暮らしの充足感」・「偏見」の4項目について、参加者ごとに、活動後には新たに「加わった」のか、「維持」されたのか、活動前は選択していたが活動後は「消失」したのか、活動前・後ともに「選択されず」だったのかを検討した。「社会活動」については、18名のうち、「維持」の該当者が6名、「加わった」が9名であった。「人間関係」は、「加わった」(6名)と「選択されず」(7名)がほぼ同数だった。「暮らしの充足感」では、「消失」が5名、「選択されず」が8名だった。「偏見」は、14名において「維持」されており、2項検定の結果、維持された人数の方がそれ以外の人数よりも有意に多いことが示された(5%水準)。「偏見」以外の3つの項目ごとの結果については、「維持」と「加わった」を「気づきあり」、「消失」と「選択されず」を「気づきなし」とし、2項検定を行なった。その結果、「社会活動」においては「気づきあり」が多く(1%水準)、「人間関係」には有意差がなく、「暮らしの充足感」には「気づきなし」の方が有意に多い傾向が認められた。つまり、「偏見」による生活しづらさについては活動以前から気づきがあり、「社会活動」への気づきは活動後に増加することが認められたが、「人間関係」と「暮らしの充足感」については、活動の効果ははっきりとは認められないことが示された。項目ごとの結果全体は、図4にまとめた。

### 考察

#### I. 「精神障害者との社会的・心理的距離」の結果

図1に示されるように、活動の前と後では、「精神障害者との社会的・心理的距離」に関するとらえ方が違っていた。地域社会の一員として共に暮らす人物という観点からの質問項目(問10~15・17~21・23・24)で

も、生活を共にする人物という観点からの質問項目（問16・22）でも、多くの項目において、活動後の方が肯定感が高くなっていった。肯定的な方向への変化が認められなかった項目はあった（問15・問16・問21・問24）ものの、活動による否定的な変化は全くなかったのである。活動後においても、肯定的な度合いが最も低かった「精神障害者が、一人あるいは仲間どうしてアパートを借るのは心配だと思う」かを問う項目（問23）にしても、より肯定的な方向へ変化していることを斟酌すれば、適切な援助があつての自活という、支援の必要性をふまえての見解ではないだろうか。精神障害者が、自立した生活をするには、条件があることを知ったため、結果として他の項目よりも低い評価にとどまったと推測される。

知識伝達の場合となる講義（「精神保健福祉論」）においても、精神保健福祉士の役割として、支援が必要であることは学んでいる。しかし、講義のみの場合、項目別の変化までは見出されなかった（木浪・小川, 2007）。それが、理論と実践を兼ね備えた今回の実践的学習をふまえると、15項目中11項目において、明確に、肯定的な変化として現れた。その変化が認められた項目には、「ふだんは社会人としての行動がとれる（問12）」、「信頼できる友人になれる（問17）」、「病気の再発を防ぐために自分で健康管理をする（問18）」といったものが含まれている。これらの結果に現れた、肯定的な変化とは、精神障害者に対する信頼感の増加であろうと思われる。直接的な交流が、意識を変えたということになる。

また、その効果は、地域社会の一員として共に暮らす人物という観点からの質問項目だけでなく、生活を共にする人物という観点からの質問項目（問22：精神障害者の人と結婚できますか）でも認められた。援助の対象者としてでなく、より身近な存在として受け止める変化が生じたのだと考えられる。

隣人になったときの付き合い方を示す表1には、どのように隣人として関わるのかについて、活動前後の態度の変化が読み取れる。この設問は、4つの選択肢から答えを選ばなければならないものだった。精神障害者に否定的なイメージを持たず、共に暮らす人物とみなしていれば、「困っている時には、できるだけ手を貸すようにつとめる」と「他の人と同じような付き合いをする」の、どちらの態度を優先するのかとの問いかけになる。活動前から、この2つのいずれかしか選択されていず、活動に参加した学生達は、もともと、共に暮らす人物と

して受け入れる気持ちはあったということだろう。その状態に、参加型学習実践が、「困っている時には、できるだけ手を貸すようにつとめる」から「他の人と同じような付き合いをする」への変化をもたらした。つまり、精神障害者に対して、どちらかという困っている人たちという認識を前提にした付き合いから、一般的な他者としての付き合いへと変化しているのである。

理論と実践を兼ね備えた学習活動は、「精神障害者との社会的・心理的距離」をより肯定的に変化させ、精神障害者との日常生活における交流における抵抗感を少なくすると言えるだろう。ただし、生活を共にする人物という観点からの質問項目はそもそも2項目しか設定されていず、肯定的な変化が認められたのは、そのうちの一方のみであった。肯定的に変化するとは言え、非常に身近で生活を共にするような関係ということになると、不安定なものに留まるのかもしれない。しかし、日常生活の支援という観点から、精神保健福祉士に求められる援助策の理解を促進する体験になったことは確かである。

## II. 「精神疾患・精神障害者へのイメージ」

### 精神疾患へのイメージ

問26では、「具合の良いときも、悪いときもある不安定な病気」との回答が、その他の選択肢と比べて、活動前・後ともに多かったが、活動後の方がより明確に多かった。その結果を詳しく見ると（表2）、活動前に他の回答をしていたものも、活動後には全員がこの回答に変化していた。活動前にはこの回答を選択しながら、活動後に「1. 病気のひとつで治療もだんだん分かっている病気」へと変化した2名は、学習の中で治療法の進展の情報を得たことであろう。いずれにしても、精神疾患に対して、全員が正しい認識を得たといえる。

### 精神障害者へのイメージ

問27は、漠然と「精神障害者に何らかのイメージを持っていますか」と尋ねるものであり、活動前後での大きな変化は認められなかった。むしろ具体的な項目を挙げ、イメージの内容について尋ねた問28における変化が注目される。

それがどのような変化であったのか、図2には端的に示されている。参加前は、ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルに分けた、3種類のイメージの様々な組み合わせが認められた。しかし、参加後は、全員に、ニュートラルなイメージまたはイメージは持たないの、

どちらかの回答が含まれるようになっていた。交流後においても、「イメージは持たない」ということは、先入観は持たないということであり、純粋にニュートラルなイメージであるとみなせる。参加後、ネガティブなイメージが全くなくなったわけではないが、全員がニュートラルなイメージを、単独でか、併せ持つという状態になったのだ。偏見というよりは理解に変わったといえるだろう。通常、直接知り合っていない人物に対して、ある一定の方向性をもったイメージを抱くことはほとんどない。この結果は、今回の活動を通して、精神障害者へのイメージが、見知らぬ他者に対する一般的なイメージと同様のイメージへと、変化したことを表している。精神障害者に対する先入観が払拭され、一般的な出会いと同じように触れ合うことができるようになる可能性が示されたことになる。援助対象を偏りのない視点からとらえ、様々な現場で、相談・援助活動に活躍する人材を育成するには、事前にどのような学習のチャンスを提供しておくべきであるのかを考える際、重要な示唆を与える結果であろう。

### Ⅲ. 精神障害者が抱える「生活のしづらさ」への見解

活動前後で、最も大きく変化したのは「人間関係」であった(図3参照)。「話し相手がいない」・「友達がいない」「結婚できない」などの人間関係に由来する生活のしづらさに、活動前に気づける人の比率は低かった(該当者は1名)。しかし、活動後においても半数に満たない程度であり、この人間関係への気づきは生まれ難かったことになる。実践的学習活動の後半は、グループ別の展開になったこともあり、アンケートのためのインタビューをしたかや、個別におしゃべりする時間がどれだけあったかなど、活動の内容により、気づきに差違が生じたのかもしれない。

「安らげる場所がない」・「日中過ごす場所がない」・「目標がない」・「役割がない」などの、暮らしの充足感に関する生活のしづらさについては、活動前は約4割、活動後は約3割の学生しか言及していなかった。今回、学生は援助者(生活支援者)として出会ったわけではなく、一時を共に過ごす隣人に過ぎなかった。そこまで深く話をする相手として、学生たちが受け止められていなかった可能性もあり、その状況の中で、気づくのが難しかったのであろう。加えて、出会いの場が地域活動支援センターだったことで、通って来ている当事者にとっても、そこに居ることで、問題意識が薄くなっ

ているのかもしれない。むしろ、これらの悩みは、学生にとっては解消されているように映り、気づきとしては現れにくかったのかもしれない。

「信頼されない」・「一人前に扱われない」・「奇異な目で見られる」・「病気の話ができない」・「理解されない」・「家事ができない」という「偏見」による生活のしづらさについては、活動以前から気づきがあり、活動後も維持された。現実問題としての偏見は、社会の中にすでに存在しており、講義のおいても解説されていた。それに加え、七夕の短冊に込められた願いや、アンケートへの回答など、精神障害者が持つ悩みの深さを窺い知る機会があったことによると考えられる。直接的な交流を含む学習活動ならではの効果と言えよう。

「仕事に就けない」・「収入がない」という「社会活動」における生活のしづらさへの気づきは、活動後に増加することが認められた。センターやデイケアの通所は、「仕事に就けない」ことの体现であり、それは、また「収入がない」ことに直結している。センターで出会い、交流したことにより、当事者の抱く、この切実な悩みに気づかせられたのは確かである。

ただし、「人間関係」と「暮らしの充足感」における生活のしづらさについては、活動後、気づきが生じた学生と生じていない学生とに分かれた。「偏見」については事前からの知識があるため、「社会活動」については共に活動することで、気づきやすかったのであろう。

「人間関係」と「暮らしの充足感」における生活のしづらさについては、活動後に参加者全員で意見交換し、問題状況を把握し、共有する努力があれば、活動の効果がより明確に認められたかもしれない。

今回の結果から、直接交流を含む実践的な活動には、知識の習得のみでは得られない有益な効果があることが示された。対象者が18名と限られた人数であったため、この効果の一般性については、今後さらに検証する必要があるだろう。精神疾患そのものについては正確な理解へ、精神障害者については不偏な理解への変化が期待できることを示唆する結果と考えている。

今回、参加型学習実践の要素を取り入れたのは、「演習・コミュニティーアワーⅡ」だった。つまり、対象者となった学生は、必ずしも精神保健福祉士を志しているわけではなかった。そうであっても、参加型学習実践は肯定的な効果をもたらした。精神保健福祉士を目指す学生を対象とする授業としては、「精神保健福祉援助実習」がある。この授業で実施されている精神保健福祉士

養成の事前教育プログラムの中には、直接交流は取り入れられていない。現行の事前教育は、参加型学習実践にはなっていないのである。真の生活支援者として機能する精神保健福祉士を育成するには、精神障害者が抱える生活の困り感を正しく理解し、適切に対応する技能をいかに培うか、その方法論の開発が今後の中心的課題となる。

#### おわりに

正確な情報伝達の効果について調べた、木浪・小川(2007)での結論を受けて、本研究においては、学生のゼミ活動の中に、当事者との直接的な交流を含む参加型学習実践を導入し、それによる変化を検討した。その学習活動は、「精神障害者への支援」をテーマとするゼミへの参加を希望した学生の、約1年間の、自発的な学習意欲により展開された。ただし、すべての裁量が学生に委ねられたわけではなく、教員の大きな配慮のもとに、学生がその主導性を存分に発揮できるような学習活動を目指したものであった。

活動前後での、質問紙調査の結果、精神障害という疾病についてはより適切な理解が促進され、精神障害者についてはより信頼できる人物とみなす方向に、意識が変化することが示された。さらに、精神障害者にとっての生活のしづらさについての気づきを促すことも明らかになった。これらは、正確な情報伝達ではもたらされなかった効果である。精神障害者と直接触れあい、自律的に情報を収集して学ぶということが、有能な援助者の育成にとって重要な要素であることが示唆される。

直接的な交流体験として次に研究しなければならないのは、精神保健福祉現場実習を体験した3・4年次生についてである。専門コース専攻の前段階にある1年次生と、何度も精神障害をもった人との交流の機会を体験した3・4年次生とについて比較検討する必要がある。また、今回のような、仲間としての交流と、実習での体験の比較検討も必要になる。このような一連の研究の成果を、今後、「こころのバリアフリー」の精神に根ざし、隣人として地域で暮らす中で当事者を支援できる人材育成プログラムの構築につなげていくことを目指す。

ゼミ生は精神障害者との出会いを望み、仲間としていくつかの活動に共同で取り組み、何度かの交流をした。これら一連の活動の成果については、“「知りたい」から「知ってもらおう」へ-てくてくさんぼみちin木浪ゼミ”と題し、約150人の聴衆に報告している。発表の題

名には、その経験を友人や後輩に知ってもらおうと思うに至った心根が映されている。学生の意識の中から、精神障害者に対する先入観を払拭するような変化が生じ、そのような学びについて、多くの人たちとの共有を願ったのである。この会場には、医療法人千水会社会復帰部門部長の出席を得ることができた。現実に地域で当事者を支援している方の眼差しに見守られた、実践学習活動であったことも忘れてはなるまい。ご協力には心から感謝申し上げる。

#### 文献

- 木浪富美子(2006)「心のバリアフリーアンケート調査～当事者に実施して～」 関西福祉大学研究紀要,203-207.
- 木浪富美子・小川徳子(2007)「大学生における精神障害のとらえ方～正確な情報伝達による変化～」 関西福祉大学研究紀要,37-46.
- 元気になろうやフェスタ実行委員会・ほか(2006)「こころのバリアフリーを推進するために必要なこと～精神疾患及び精神障害者についてのアンケート調査を実施して～」 第12回岡山県保健福祉学会報告要旨集, 46-7.
- 元気になろうやフェスタ実行委員会・ほか(2006)『勝英地域こころのバリアフリーに関するアンケート調査報告』. 勝英保健所.

付記：本調査にご協力いただいた関西福祉大学の学生のみなさまと、データ処理にお力添えくださった加藤嘉代さんに感謝申し上げます。

